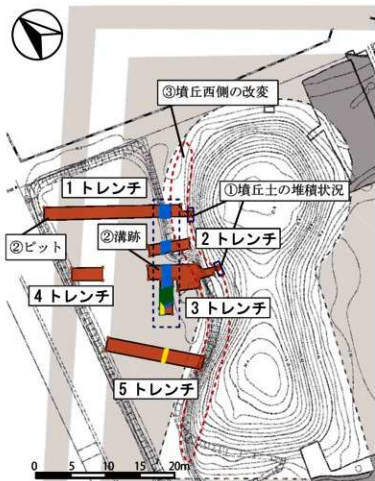


令和3年度 特別史跡埼玉古墳群愛宕山古墳発掘調査 現地見学会



○愛宕山古墳と発掘調査の概要

愛宕山古墳は、墳丘全長 54.7m の前方後円墳で、埼玉古墳群の 8 基の前方後円墳の中で最小です。昭和 56 年に行われた発掘調査で、方形の二重周堀を有することがわかりました。今回は約 40 年ぶりの発掘調査で、初めて古墳の西側の調査を行いました。

残念ながら、西側は想定以上に後世の改変を大きく受けており、目的としていた周堀や墳丘造出しの検出には至りませんでした。しかし、墳丘土の堆積状況や削平されている範囲などが明らかになったことは、大きな成果と言えます。また、遺物は破片のみの出土ですが、形象埴輪片や石室石材と思われる緑泥石片岩、角閃石安山岩、櫛描波状文を有する精緻な須恵器片等が出土しています。

①墳丘土の堆積状況（裏面の写真参照）

後円部西側と西側くびれの部で、墳丘盛り土の堆積状況を確認しました。愛宕山古墳や周辺古墳の過去の調査成果との比較から、黒色土層が旧表土、その直上の黄褐色土層が墳丘盛り土と考えられます。

②検出された遺構

1～3 トレンチにかけて、墳裾付近で直線状の溝跡が検出されました。覆土からは多量の埴輪片と須恵器片が出土しています。1 トレンチでは、墳丘の推定範囲より内側に位置しており、墳丘を一部削平する形でこの溝が造られたと考えられます。同様の溝跡が、後円部北側や前方部南側からも検出されています。3 トレンチでは、このほかに新しい時期の溝跡が 2 つ検出されています。

1 トレンチ西端ではピットが検出されていますが、覆土の様相から古墳時代より新しい時期のものと考えられます。

③大きく破壊された西側の状況

古墳の西側は、後世の耕作等によって全面的に改変を受けており、周堀は完全に破壊されていました。

また、墳丘も大きく改変・削平されていることがわかりました。後円部西側のステージ状の部分は、近世以降の瓦が出土していることから、後世に造られたものです。くびれ部から前方部にかけても崖状に大きく削平されており、残存状況は極めて悪いことが明らかになりました。



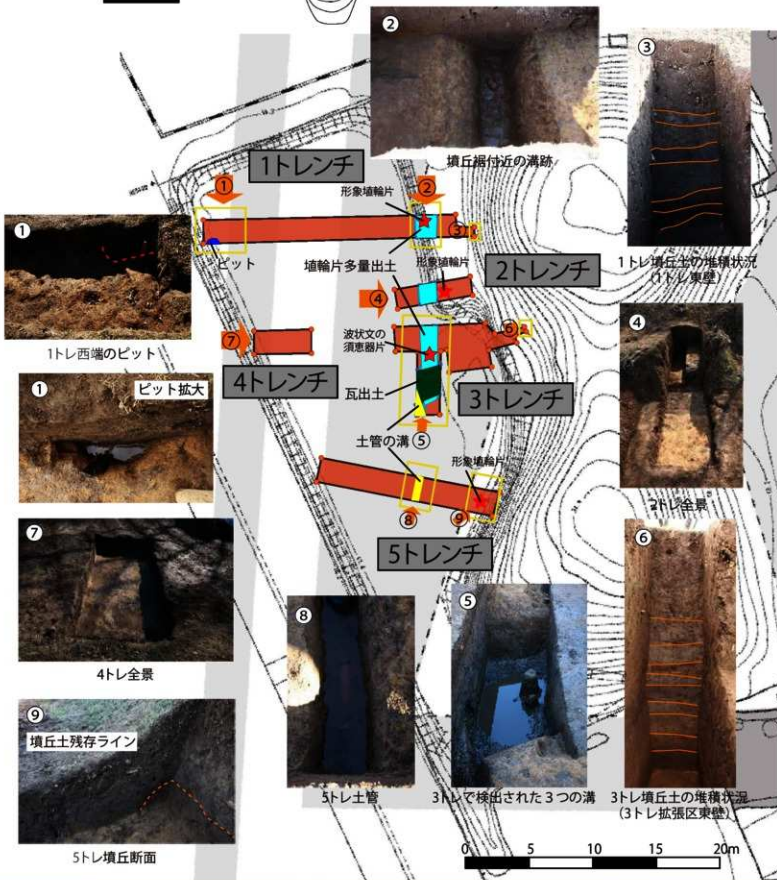
1トレ填丘南壁セクション図(左右反転)

填丘土残存ライン

17.800

0 5=1/50 1m

②の溝跡



1トレ西端のビット



ビット拡大



4トレ全景



5トレ填丘断面



2



3



4



6



3トレで検出された3つの溝



5トレ土管

0 5 10 15 20m